Japan Society of Obstetrics and Gynecology

369　子宮内膜症の進展に対するsoluble ICAM－1の関与

東北大
吉田英宗，菅原準一，高屋りさ，戸澤秀夫，
深谷孝夫，矢嶋　聰

【目的】子宮内膜症患者の腹水中免疫担当細胞の異常が内膜症病変の進展に関与し，これらを局所で調節する因子の一つとして細胞間接着分子の一つであるICAM－1が関与している可能性がある。今回，子宮内膜症患者腹水中，および種々の条件下で培養した末梢血中単球の上清中の soluble ICAM－1濃度を測定すること，また培養上清中のサイトカイン濃度を測定することによりsoluble ICAM－1と子宮内膜症の進展との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】腹腔鏡下手術を施行した内膜症患者及び非内膜症患者より，手術時腹水及び末梢血を採取した。末梢血は，PBSで希釈後Ficoll－Conray 溶液比重遠心法にて単核球を分離し，ついでプラスチック付着法にて単球を分離した。得られた単球を3×10^5/mlの濃度に調整しRPMI 1640培養液（10％FCS添加）で培養した。単球にICAM－1を発現させる因子として，培養液中にM－CSF（10，20，50 pg/ml），IFN－γ（100, 500, 1000 IU/ml），IL－6（0.1, 1, 10ng/ml）をそれぞれ添加し，24時間，48時間，72時間後の培養上清を採取，培養上清および腹水中のs-ICAM－1濃度をELISA法にて測定した。また培養上清中のIFN－γとIL－6濃度をELISA法にて測定した。

【成績】1. 内膜症患者腹水中のs-ICAM－1濃度は，コントロールに比し高い傾向を示した。2. 単球培養上清中のs-ICAM－1濃度は各サイトカイン添加により濃度依存性に高くなる傾向を示した。3. 培養上清中のIFN－γ，IL－6 濃度はコントロールに比し高い傾向を示した。

【結論】子宮内膜症の進展にはs-ICAM－1が関与している可能性が示唆された。

370　異所性子宮内膜におけるoxytocin受容体遺伝子発現とその生理的意義

防衛医大
水本賀文、古谷健一、徳岡　晋、三井千栄子、
村上充剛、大山さおり、牧村紀子、菊池義公、
永田一郎

［目的］最近、子宮内膜とoxytocin受容体(OTR)との生理学的関係が注目されているが、異所性子宮内膜における病態生理は不詳である。今回子宮内膜症患者の異所性子宮内膜組織のOTR遺伝子発現およびOTRの免疫組織学的検討を行ない、さらにdanazol(Dz)、buserelin(Bu)および妊娠中による異所性子宮内膜組織のOTR遺伝子発現の変化を調べた。［方法］(1)組織採取:子宮内膜症患者(未治療5例、治療3例、妊娠2例)の子宮内膜および異所性子宮内膜を患者の同意を得て採取した。内膜症治療はBu900μg/日またはDz400mg/日を4ケ月を行ない、妊娠例は14週と16週時に採取した。(2)免疫染色:ヒトOTR細胞外domainに対するmonoclonal抗体(OTR抗体)を用いた。(3)RT-PCR:増幅領域はヒトOTRcDNAの細胞膜貫通domain領域で実施し、特異的probeにて検出した。OTR遺伝子発現量はβ-actinの遺伝子発現で比較した。［成績］(1)子宮内膜および異所性子宮内膜にOTR遺伝子発現が認められた。(2)子宮内膜および異所性内膜の腺上皮が同様にOTR抗体で染色された。(3)治療例および妊娠例の異所性内膜はそれぞれ組織学的に萎縮・脱落膜様変化などが認められたが、OTR遺伝子発現量に有意な変化を認めなかった。[結論](1)異所性子宮内膜に子宮内膜と同様にOTR遺伝子が発現し、異所性子宮内膜はoxytocinの標的組織であることを今回初めて確認した。(2)内膜症の薬物治療や妊娠はOTR遺伝子発現に有意な影響をおよぼさなかった。以上の結果より内膜症病巣のOTR遺伝子発現はステロイドホルモンによる病巣の形態的変化と異なり、内膜症病巣の基本的な維持機構に関する重要な因子であることが示唆された。

NII-Electronic Library Service